

『源氏物語』 「葵」 卷制作過程論

呉 羽 長

（一九九〇年八月三〇日受理）

A Study of the Creative Process of "Aoi" in *Genji Monogatari*

Susumu KUREHA

一 はじめに

「葵」巻は、新しい政治的局面に位置付けられた源氏をめぐって、齋院御禊の折の六条御息所と葵上の物見車の所争い、及び引き続く葵上の出産・死において右の二人の上の品の女性達との関係を整理し、一方併行する時間の中で紫上の新枕を描いて彼女の存在を確定していく巻である。この巻には、多層な叙述のありかたがみられ、その執筆については従来の指摘にない複雑な経緯があったものと考えられる。本稿では、この巻を構成する諸挿話の関係を吟味することで右の成立に関する見解を掘り下げ、この巻の制作過程を解明してみたい。

考察に先立ち、この巻についてその構成する小段（挿話）に分け、その概要を次に掲げる。各々に付した（ ）内のページ・行の数字は、それぞれの挿話の始まりを示す。¹⁾

- ①冒頭、桐壺帝退位後の源氏の様子（三一七ページ五行）
- ②六条御息所の伊勢下向の意志、御息所の処遇について桐壺院の源氏への

苦言、朝顔の思慮と葵上の妊娠の兆し（三一七ページ四行）

- ③齋院の交替、御禊見物の折の車争い、六条御息所の屈辱と悲嘆、源氏の姿を見る朝顔姫君の思い（三一九ページ二行）
- ④祭の日女君達の車争いを伝え聞いた源氏の苦慮（三三三ページ一五行）
- ⑤紫上の髪そぎと祭見物、見物の折の源内侍との贈答（三三四ページ一〇行）

- ⑥源氏の疎遠について六条御息所の車争い後の苦悩（三三七ページ九行）
- ⑦葵上の出産苦、物の怪出現、その出産の騒ぎを聞く六条御息所の動揺（三三八ページ四行）
- ⑧六条御息所の転居、源氏の訪問（三三九ページ一〇行）
- ⑨葵上につく物の怪が自らのものであることを知り、六条御息所懊悩（三三一ページ四行）

- ⑩齋宮の入内、六条御息所の病悩（三三二ページ五行）
- ⑪出産のけはい、六条御息所の物の怪出現、源氏と語る。出産。それを伝え聞く御息所の動揺と苦慮（三三二ページ二行）

- ⑫ 源氏春宮に訪むる前に葵上に挨拶、二人の融和（三三六ページ九行）
 - ⑬ 葵上の急死と葬送（三三八ページ一三行）
 - ⑭ 源氏の葵上哀傷（三四〇ページ一三行）
 - ⑮ 四十九日の追善の間の独居のつれづれ（三四一ページ一行）
 - ⑯ 六条御息所と歌の贈答、御息所へ物の怪の正体についてはめかす（三四二ページ八行）
 - ⑰ 正日までの籠居の折に三位中将と源内侍について取り沙汰（三四四ページ一二行）
 - ⑱ 時雨降る日の夕暮れに三位中将と葵上哀悼の贈答（三四五ページ五行）
 - ⑲ 大宮と秋草をめぐつての贈答（三四六ページ一〇行）
 - ⑳ 朝顔姫君との贈答（三四七ページ二行）
 - ㉑ 葵上付女房達との語らい（三四八ページ七行）
 - ㉒ 左大臣との語らい（三五〇ページ一四行）
 - ㉓ 桐壺院に参上、藤壺中宮と王命婦を介しての語らい、春宮に拝謁（三五四ページ九行）
 - ㉔ 二条院のさま、大人びた葵上の魅力（三五五ページ七行）
 - ㉕ 葵上との新枕（三五七ページ三行）
 - ㉖ 新枕後の源氏と葵上（三六〇ページ一五行）
 - ㉗ 朧月夜の様子（三六一ページ七行）
 - ㉘ 葵上の装束、父兵部卿宮とのひきあわせ（三六二ページ三行）
 - ㉙ 新春、左大臣邸へ出向き大宮と歌の贈答（三六二ページ一五行）
- 右のように「葵」巻を二十九に分けた。これによりこの巻の構成が明らかになる。①冒頭部の桐壺帝退位後の源氏の状況をめぐる叙述に次いで、②で女君達の源氏との関係が概括され、以降六条御息所と葵上の挑み合いとして車争い（③、④）とそれに引き続く葵上の出産・死（⑥、⑬）が、二条院の葵上の可憐な姿（⑤）を点描しつつ描かれる。更にその後日譚として葵上を

哀傷する源氏の姿（⑭、⑮）が辿られ、二条院での葵上との新枕を中心とする二人の交渉及び朧月夜をめぐる記述（⑲、㉓）を挟んで、再び左大臣邸での大宮との葵上追慕の贈答をもって閉じられる（㉕）。

二 冒頭部の位相

まず①の巻冒頭部について考えたい。この箇所において桐壺帝の退位及び源氏の大將就任がほめかされ、新しい政治的局面の中に源氏は据えられている。この冒頭部は、以下の記述になっている。

世（の）中変りて、よろづ物憂く思され、御身のやむごとなきも、添ひ給へば、かるくしき御忍び歩きもつゝ、まじう、こゝもかしこも、おぼつかなきの、なげきを重ね給ふ報いにや、なほ、われにつれなき人の御心を、つきせずのみ思しなげく。今は、ましてひまなう、たゞ人のやうにて、そひおはしますを、今後は、心やましう思すにや、内裏にのみ侍ひ給へば、たちならぶ人なう、心やすげなり。をりふしに従ひて、御遊びなどをこのまじう、世の響くばかり、せさせ給ひつゝ、いまの有様しも、めでたし。たゞ、春宮をぞ、いと恋しく思ひ聞え給ふ。御後見のなきを、うしろめたう思ひ聞えて、大將の君に、よろづ聞えつけ給ふも、かたはら痛きものから、「嬉し」と思す。（三一七ページ）

ここでは、公務の多忙で忍び歩きも難しく愛人達の悲しみを大きくさせている源氏が、その報いにより藤壺との猶かなえられぬ恋を嘆いているさまと、一方で退位後の桐壺院が、藤壺と一緒に院の御所にあり、内裏に一人いる春宮（冷泉）をおぼつかなく思つて、源氏に後見を求める事情が捉えられている。

この、藤壺の問題を絡めた源氏の政治的情勢の定位は、しかしこの巻において以降殆ど顧慮されることはない。弘徽殿女御についても桐壺院と離れて

内裏にあることを述べるが、源氏とこの女御との対立はこの巻では書かれることなく、同じく源氏の藤壺への恋心は右に掲げた次の件り、つまり②源氏の六条御息所処遇に対する桐壺院の苦言の厳しい調子から源氏が藤壺との密事の露顕した場合の恐ろしさを思い及ぶ箇所と言及がみえるだけで、以下には描かれない。③に藤壺が登場するが、そこでは二人の密事に関する内容はみられない。その点冒頭部は以下の挿話へ発展するものをもたず、ここで描かれる藤壺との関係を含めた政治的情勢は、車争い以下の展開の前提としてあるに止まり、その情勢を据えた上で別個の路線で固有のテーマが描かれているものと捉えられる。

更に、この冒頭部の記述とそれ以降の記述内容に齟齬を生じていることも注目すべきところである。つまり冒頭部で源氏について「御身のやむごとなさ」により軽々しく行動できず、「こゝもかしこも、おぼつかなさの、なげき」を重ねると記されているが、この妻妾達への忍び歩きの至難さは、引き続き②で、葵上の妊娠に起因する病悩のため「かやうなるほど、いとゞ、御心のいとまなくて、思しおこたるとはなけれど、とだえ多かるべし。」(三一九ページ)という理由によってになっており、近接する箇所の一つの現象(源氏の妻妾達との疎遠)について異なる理由をあげている点、奇異な印象は否めない。

内容上の齟齬は他の箇所との間にもみられる。葵上の出産の後、⑫で源氏は春宮が恋しく思われ、春宮を訪ねようとして女房にその意思を伝えている。一方葵上の前では「院などに参りて、いと疾うまかでなん」(三三八ページ)と言っている。桐壺院と春宮は右に掲げた冒頭部の内容から考えると同じ場所にいないはずである。しかるにここで源氏は一度に二人のところへ行こうとしている。葵上に対して春宮を訪ねることを隠す必要もないので、この時点で作者の意識としては、桐壺院・春宮が同一の場所にいるものとして考えられていたのではないかと思われる。同様なことは⑬との間にもいえ

る。桐壺院に拝謁した源氏は藤壺中宮と語り合う。その直後「春宮にも、「久しうまゐらぬおぼつかなさ」ときこえ給ひて、夜ふけてぞ、まかで給ふ。」(三五五ページ)と春宮への拝謁をおこなう記述になっているが、院の御所・内裏の間の移動を記していない。⑫では結局源氏がどちらへ行つたか書かれておらず、そのことからその、「どちらか一方」という意識がなかったことを示しているといえよう。

また、⑫の源氏の春宮・桐壺院拝謁のための左大臣邸退出の際の挨拶の場面、折しも左大臣は除目のため内裏へ出かけている。この時源氏は除目へ出席しなくてよかったというのも不審である。冒頭部に「御身のやむごとなさ」とあつて、宰相を兼ねた大将であるからには、当然出席しなければならぬ立場である。それなのに参内しないのである。これも冒頭部との記述内容の齟齬として考えられる。これは作者が冒頭部で提示された公人性、「大将・宰相」という役柄の政治的意味合いをさほど意識していないことによるものであろう。宰相であることは⑤の車争いのところでも想像できるが、ここでは源氏に斎院供奉をさせるための前提として梓づけられたもので、「御身のやむごとなさ」のもつ公人性をさほど意識したものでなく、⑫と抵触するものでない。やはり⑫と冒頭部の記述の対立性がきわだっている。

このように冒頭部がその後の記述を導くものでなく、その記述に対していわば付加的な位置にありそれらの内容と齟齬が認められることは、その後の件りと執筆の意識を異にして描かれたことを示すものではないか。冒頭部は「御身のやむごとなさ」の語で源氏の大将就任を暗示している点、「紅葉賀」巻末の源氏の宰相就任・桐壺の退位の意志(二九九ページ)という記事を踏まえたものと認められる。彼の政治の場での栄達を含めたその人生行路の展望においてこの冒頭部の叙述がおこなわれているのである。それが付加的である点、既に⑫以降のこの巻の主要部分が書かれてからの全体的操作としての書き添えと認めてよからう。桐壺帝の退位は既定のこととなく、

大将兼宰相としての公人性は顧慮されないという形が②以降の本来のありようであったのではないか。冒頭部は既にあったこの②以降の記述を、「紅葉賀」巻など他の巻との関係の中へ位置付け、源氏を長編的構想の中で語ろうとする意図において書き加えられたものと考えられるのである。(②以降で桐壺が「院」とあるのは冒頭部を添えてからの変更であろう。) そうした他の巻との関係を整えようとする意志によって書かれたために、冒頭部は以降の記述と内容上の齟齬を生ずる結果になったのである。②の語り出し「まことや」は、以降の記述に先立って①を据えるために要請されたことばであったのではないか。またその場合「御身のやむことなさも、添ひ給へば」という大将昇進を示す曖昧な語も、既に源氏が大將としての定位されていた後をうけて付加的に書かれた故の曖昧さであったといえよう。

このように冒頭部がそれ以降の挿話が書かれた後の書き添えと認められるとき、それにひき続く②以降の挿話群においては、源氏の政治的情勢の定位とは無関係に彼の六条御息所・葵上・紫上などとの関りが展覧されているものとして捉え直していくことが必要になってくる。

三 「葵」巻の三つの挿話群の系列

②以降における六条御息所をめぐる運命は、葵上との関係の中で具体化していく。そこでは車争い・葵上の出産・死と展開するが、そこにこの二人を意識する朝顔姫君が絡んで上の品の女性達と源氏の関りの姿が辿られる。これら葵上・六条御息所らとの交際を描く挿話としては②・④・⑥・⑭・⑲があげられる。こうした挿話での源氏の呼称は「大将の君」「大将」「大将殿」で一貫している点、押さえておきたい。

一方そうした一連の叙述と並行するように源氏のもう一つの時間の流れとして紫上との交渉がある。この源氏の紫上との関りを述べる挿話としては

⑤、⑭・⑲、⑲が指摘できるが、これらにおける源氏の呼称に注目してみると、「君」「をとこ君」とあり、これらの箇所では⑲を除いて御息所・葵上の存在が意識されていない。「君」「をとこ君」とあるのは、「若紫」巻などで「源氏の君」「君」などとあった呼称と繋がるものである。「若紫」巻では中将の折の源氏の紫上の発見及び彼女のひきとりの記事が描かれるが、そこで「中将」という呼称が二例あるものの例外的で、基本的に官職名で源氏を呼んでいないといえる。「紅葉賀」巻でも紫上と関る件りには「をとこ君」「源氏の君」とある。ここでの源内侍とのあだめいた交渉の件りも「源氏の君」「君」である。そうした時点の私人性をもった呼称と呼応して「葵」巻の⑭を除くこれらの件りでは、他の上の品の妻妾達との関りの時間を意識せず純粹に源氏と紫上の関りを描いて、「源氏の大將」の物語と別の時間の流れを形成している。これら「源氏の君」の紫上の系列の場合、源氏を「大将」とする挿話群が六条御息所・葵上・朝顔の確執など切羽詰まった切実感、暗さをもつのに対し、⑤後半の源内侍との歌の贈答の件りを含めて明るい印象である。この時期の紫上は、それが性格的行動的に描き足っていないという松尾聰氏の指摘⁶⁾をうけて秋山虔氏が捉えられたように、現実世俗の諸関係とは遮断されたところで生きることの艱難を忘失させる愛の対象、美しい生き人形として可憐に描かれている。そうした紫上像について、更に秋山氏は、藤壺の形代たる理想の女性として登場すべく約束づけられていたことにその由縁を求められるが、このような把握がなされるのも、これら紫の上をめぐる記事が前述葵上・六条御息所の話と系列を異にしてその時間と没交渉・孤立的であることに由来するものである。それは制作における孤立性に原因があるのではないか。

但し、六条御息所・葵上など上の品の女性達との交渉を扱う挿話群のうちで、⑦、⑮、⑯では、「大将」の呼称が使われているが、これらは前述の⑤、⑭、⑲、⑳といった紫上をめぐる挿話に対して孤立的ではなくその挿話

の内容をも踏まえていると認められる。例えば⑦では「大殿には、御物の怪めきて、いたう、わづらひ給へば、誰も思し嘆くに、御ありきなど、便なき頃なれば、二条の院にも時々ぞ渡り給ふ。」(三三八ページ)とあり、⑮では「大将の君は、二条院にだに、あからさまにも渡り給はず。」(三四一ページ)とあって、紫上の存在が顧慮されながらそれぞれ葵上・六条御息所をめぐる記事として描かれているという具合である。⑯は⑮の「かの御息所は、斎宮は、左衛門の司に入り給ひにければ、いとゞ、いつくしき御清まりに事づけて、きこえも通ひ給はず。」(三四二ページ)から御息所との交渉を展開させたものである。更に⑰の三位中将との関りは⑮の独居の忍びがたい悲しみをうけてその解放を意図した一齣といえる。⑱以降⑳まで及び㉑は、⑰を踏まえそこから情趣性を増幅しているもので、やはり紫上をめぐる挿話を踏まえている。これらの挿話は、右の、互いに没交渉・孤立的である二つの系列、つまり②、③、④、⑥、⑧、⑪の葵上・六条御息所ら上の品の女性を描く挿話群と⑤、⑨、⑫、⑬の紫上をめぐる挿話群が既に書かれ、更にそれらを合流させた以降の書き加えと認められる。この点からこの「葵」巻は、

I 葵上・六条御息所をめぐる挿話群

II 紫上をめぐる挿話群

III ⅠⅡの二系列の統合以後の挿話群

という三つの系列に分けることができる。

IとIIの挿話の系列は、互いに孤立的であることでその違いが認められるが、IIIはIの内容を踏まえながら、そこにはやはりIとは異なる執筆の態度がみられる。例えば生霊になった御息所が自己の魂の遊離を自覚する場面での生霊の姿について、⑨の時点では御息所の夢の中のこととして、

少し、うちまどろみ給ふ夢には、「かの、ひめ君と思しき人の、いと清らにてある所に行きて、ひきまさぐり、うつ、にも似ず、たけく厳きひ

たぶる心いできて、うちかなぐる」など見給ふ事、度かさなりにけり。
(三三一ページ)

と、車争いの屈辱に起因する怨念のために乱暴な姿をもって現れるが、⑦では、

物の怪、生霊などいふもの、多く出で来て、さまぐの名のりする中に、人に更に移らず、たゞ、みづからの御身に、つと添ひたるさまにて、殊におどろくしう、わづらはし聞ゆる事もなければ、また、片時離る、折もなきもの、一つあり。(三三八ページ)

と、乱暴もせず、その場で葵上につきまとうのみの態度になって一貫性をもたない。その点、その異質性が認められることである。⑨の場合は御息所の夢の中でのことであり、⑦は現実の葵上の寝所のことである点で次元が違ふものともいえるが、それにしても⑨の御息所から遊離した魂が葵上のもとに赴きそれを御息所が夢の中で自覚して、現実性をもったものと読みとれよう。⑨は夢中のこととして暗示性を強くしたところで激しさを確保している観がある。この⑨はIの挿話群の系列にあり、⑦はIIIの系列の中に位置する。この、⑦を含むIIIの系列においては六条御息所の心理にIのような生のままの迫真性はなく、つまり女性の純な思い・心の本源に深く立ち入ることせず、むしろ全体の物語の流れを配慮して、御息所の生霊の行為にもさほど激しさはない。このIからIIIへの生霊の性格の変化は、その創作意識の違いを示し、作者の物語操作の進展を証し立てるものであろう。なお、こうした点の意味については後節であらためて検討することにした。

四 葵上・六条御息所をめぐる挿話群

右の三つの挿話群のうち、最初にI 葵上・六条御息所をめぐる挿話群についてその制作の事情を検討したい。ここに位置付けられる挿話の中で、

③車争いをめぐる挿話については、その叙述の展開に不自然なところがみられる。以下、そうした叙述の矛盾点を掲げ、その胚胎する意味を明らかにしていく。この③は、

- (a) 新斎院の御禊の行列のきらびやかな様子とその見物の賑わい
- (b) 身重の葵上の、女房・大宮の勧めによる不承不承の御禊見物への出発
- (c) 御禊見物の折の六条御息所の車との所争い
- (d) 場所を追われた御息所の屈辱と悲しみ
- (e) 御息所の目から見た上達部のさま、更に源氏の光輝く姿
- (f) 隨身の様子

(g) 源氏を見物する者として、「壺装束」姿の女・尼、老いた「あやしの者」「賤の男」、「えせ受領の女」、「うち忍びて通ひ給ふところ」のそれぞれ源氏への思いと態度

(h) 源氏の供奉を見る式部卿宮と朝顔姫君と展開するが、ここでは視点の転換が異常な形でおこなわれている。はじめ(b)では葵上側にあった視点が(c)を経て(d)では六条御息所の心の中に深く入り込み、(e)になると、一転して冷静になった御息所の目からの上達部・源氏の姿が描かれる。そして(f)ではその視点は曖昧になって御息所から離れ、いわば一般的・客観的位置に至る。以下その位置から(g)では源氏を無条件にほめあげる賤しい者達や受領の娘・源氏の忍びの通いの女達が照射され、そこから連想されて朝顔姫君へとせり上がってくる。賤しい者達に視線が向けられるのは御息所の乗った車がそうした者達の中へ押しやられたことで了解できるが、そこから受領の娘を経て「うち忍びて通ひ給ふところ」の女達の内面に立ち入るのは不自然で、御息所に視点がないこと瞭然である。既に一般的・客観的視点にあると見なされよう。そしてその忍びの通いの女達の中には当然御息所のこと含まれているものと思われる。それはそこから朝顔姫君の思量に繋がっていることから理解できるのであるが、その場

合、殊更に視点人物として御息所の内面を描き出した(d)との関係は均衡を失うものになる。このように一貫した方向性がなく雑然とした連続になっている感がある。こうした不自然な叙述の流れ及び各叙述の不均衡な関係は、(e)以降と(b)・(d)の間に一つの断層があることを示している。また(a)の記述から(e)以降の記述への繋がりは車争いとは無縁に斎院に供奉する源氏に憧れる人々の姿を一般的視点から描いたものとして一貫し、まことに自然なものであり、(b)・(d)はいわば(a)と(e)以降を繋ぐ流れの中に挟み込まれた観がある。この点から(a)・(e)・(h)と(b)・(d)の各々は異なる意識において書かれ、それがあ

る時点で物語の要請によって合流させられたものと想像される。

この③の件については、葵上が身重の時にも拘らず御禊見物をする事になっていくが、その点でも不自然さが否めず、葵上を強引に車争いに導いている感がある。御息所の源氏への思いにしても、この③の(d)の、

・さすがに、つらき人の御前わたりの待たる、も、心よわしや。「さ、のくま」にだに、あらねばにや、つれなく過ぎ給ふにつけても、中／＼、御心づくしなり。

・人の見るも、はしたなけれど、「目もあやなる御さま・かたちの、いと、しう、出でばえを、見ざらましかば」と、思さる。

(共に三三二ページ)

という源氏に切に憧れる姿が、④での心安い対面を拒んで心閉ざす態度と一貫性をもたない点は示唆的である。右の③の(d)の例は御息所の特異な心性の定着する以前の生のままの彼女の心情が吐露されているものといえる。③は葵上の身重であることとは無縁に、車争いによる御息所の恥辱とその折の源氏への憧れがその原初的なものとして書かれていたと想定することができないものか。更に③の(b)・(d)は⑨の生霊の遊離と結び付いている。私は、この③の(b)・(d)と⑨の連結、つまり源氏にこの上なく憧れる一人の女御息所が車争いで敗れた屈辱から生霊を出現させる構図が「葵」巻の原型的な姿を示す

ものと考え、その段階では葵上という明確なキャラクターは確立していなかったかもしれない。その御息所の争いの相手という漠とした存在が、別にかかれていた(a)・(e)・(h)の流れに組み合わされ、その死からその哀傷を描く⑪・⑭などを加えて、より物語の展開の相を整える時点で源氏との心の融和を得て明確な形象性を与えられることになったのではないか。また六条御息所についても右の③にみられた姿が②で上の品の女性達の関りの中に据えられ、娘を斎宮として設定されてその斎宮に従って源氏から退いていくという筋がつくられていく。こうして源氏を大将とする物語(I)が構成され、時間性をもった叙述として整えられていくのである。ここで源氏が大将であることは斎院に供奉する資格として必要であり当初からの設定であったと考えられる。

なお前節で葵上の若君(夕霧)出産直後の源氏の退出の場所(院と内裏)が明確に分かれていないことを指摘し、そこでは桐壺帝の退位が前提になっていないことを述べたが、この③の(a)の部分の斎院の交替は、『細流抄』に「此斎院たれともなし自然におり給也」⁽¹⁰⁾とあるよう、桐壺帝の退位によるものではないわけであり、そのこともこの車争い及び葵上の死は当初は桐壺帝の退位を前提にしたものではなかったことの傍証となるであろう。つまりこれらの箇所には、この巻が桐壺帝のまだ退位していないときに書かれていた痕跡が残されているのである。そうした桐壺帝退位に関する政治的状况とは無縁なところでIの系列が作られていたことが考えられる。

このように、Iにおける叙述の重層性は執筆の多層な階梯を想像させるものであり、そこに原初的な物語の痕跡を残していると考えられるのである。

五 〈紫上をめぐる挿話群〉

右のように捉えられたI〈葵上・六条御息所をめぐる挿話群〉がIIの〈紫

上をめぐる挿話群〉の系列と合流する。この系列(⑤、②4・②6、②8)はIと異質で孤立的な関係であることは既に指摘したが、この挿話群においても一律に執筆がなされたものとは認められない。

まず②4は葵上の死に傷心する源氏が桐壺院・藤壺・春宮に拝謁して後、二条院に戻りくつろぐさまを描く挿話であるが、この中に「朝には、わか君の御もとに、御文たてまつり給ふ」(三五六ページ)とあって葵上生所の夕霧のことがとりあげられ、Iの内容を踏まえていることがわかる。つまり、Iの挿話群に対して孤立性をもつIIの系列の中では例外的なところである。これはIとIIを繋げる意図をもって後の段階(III)に書かれた挿話なのではないか。

また源内侍をめぐる⑤の後半なども注意を要するところである。源内侍はIと孤立的な⑤に登場することから、本来紫上の系列中に位置付けられるが、この源内侍をめぐる記事は紫上の記事に付随しつつそれに付加的に描かれたものとして考えるべきであろう。ちなみに「紅葉賀」巻での源内侍をめぐる件りについては後の補入であるとの指摘がある。池田勉氏は、「紅葉賀」巻の中で源内侍をめぐる挿話の異質性を指摘する阿部秋生氏の所論をうけて、この挿話が源氏札讀に対する読者の批判に対応して「紅葉賀」巻に挿入されたものであり、「帚木」以下三帖の新しい物語を誘い出す機縁をつくるものと指摘されている。右の論旨の中で、この挿話が時間的にすぐ「帚木」三帖の「好色物語」に後接するものとは限らなく、「葵」巻における源内侍の記事などが引き続き書かれたものであって、物語の長編的体裁が整えられたあと、「帚木」三帖などが挿入されたという考えも根強いものであるが、ともかくこの「紅葉賀」巻の異質的な挿話と同様に「葵」巻⑤前半の紫上と源氏の関りに源内侍をめぐる話が付加されたものと考えることができる。また源内侍は、⑪の籠居する源氏に三位中将が訪問する場面にも話題としてあげられている。この⑪はIの系列に登場するはずの三位中将がIIの系列に登

場する源内侍について取り沙汰するという点で、両系列の総合の後(Ⅲ)加えられたものか。

こうしてこの系列の付加的な箇所を除くと、本来の紫上をめぐる挿話はどういうふうにつくられたものか。まず「若紫」巻などと繋がる筋をもつてⅠに並行して紫上をめぐる話があつたことが考えられよう。それとしては⑤の前半や紫上の新枕を描く②③が限定できるが、これはあくまで紫上が藤壺の形代の位置にあることを出発点にしている。その点、これらの記事は源氏の藤壺との恋をめぐる話ほど原初性はないものとみなすことができる。Ⅱの系列はそうした⑤の前半、②③を核にして、そこへ新枕以後の二人の関係を描く②④、紫上と父兵部卿宮との引き合わせを描く②⑤を加えてⅠの系列の「葵」巻における筋の展開と融合させていったものといえよう。

この②⑤・②④は、②⑤で「内裏」と「院」の明確な区別がなされ、桐壺帝の退位を踏まえていることや、②④の臘月夜をめぐる挿話(Ⅲの系列、後述)を両挿話の間に挟んでいることから、Ⅲの系列の成立の段階に書き加えられたものと考えられる。それにしてもこれらの挿話は私人性において一貫しており、Ⅱの系列に位置することが意識された上で執筆がおこなわれたものと認めてよからう。

この系列は「若紫」巻との関りを前提とする。その点で「若紫」巻の制作過程が検討されねばならないが、後日を期すこととして、別に、前巻「紅葉賀」巻について考えると、ここでは葵上をめぐる挿話の中で紫上の存在が意識されている。紫上をめぐる挿話でも葵上側の記事が載せてある。

・いとゞ、かの若草たづね取り給ひてしを、「二条院には、人むかへ給へるなり」と人の聞えければ、「いと、心づきなし」とおぼいたり。(二七五ページ)

・殿のうちの人々も、「あやし」と思ひけれど、「いとかう、世づかぬ御添臥ならむ」とは、思はざりけり。(二七九ページ)

その点から「紅葉賀」巻の紫上をめぐる話は葵上をめぐる挿話に対し孤立性をもたず、それ故「葵」巻の⑤などに先行するものでないことが認められる。「葵」巻のⅢの段階と同じ時期に書かれたものといえよう。

六 Ⅱ系列の統合以後の挿話群

続いてⅢへⅡ系列の統合以後の挿話群について考えたい。これらの執筆にもいくつかの段階が考えられる。この系列はⅠⅡをふまえて両系列を連結するという意味で、前掲②④もそれに含めて扱ふべきであろう。斎院御禊の車争いの事件について源氏が心痛する④も、Ⅰの③をⅡの⑤(祭当日の紫上の髪そぎ及び物見同車行)の記事に繋げる役割をもち、同様の位置にある挿話といえる。つまり、まず④、②④のような、ⅠとⅡの両者を踏まえそれらを統合するための記述が加えられたことであろう。加えて第三節でⅢの挿話として指摘した⑦、⑮も右の役割を背負うものといえる。

これらの書き添えに関しては、⑮で、

かの御息所は、斎宮は、左衛門の司に入り給ひにければ、いとゞ、いくしき御清まりに事づけて、きこえも通ひ給はず(三四二ページ)

とあるように、斎宮の伊勢下向の日程に従った記事を含んでおり、④でも

まだ、本の宮におはしませば、さか木のはかりにことづけて、心やすくも対面し給はず(三三四ページ)

と記されていることから、この段階で史実等にある斎宮の伊勢下向の現実に沿った記述が行われようとしたことを示している。つまりここで御息所が斎宮の下向に従って源氏との愛を諦め彼から退いていくという構図が確定しているわけである。従って同じく斎宮下向の日程を踏まえた

斎宮は、去年、内裏に入り給ふべかりしを、さまゞ、さはることありて、この秋入り給ふ(三三二ページ)

という記事のある⑩もこの段階の書き加えと推測できる。この⑩は、斎宮の伊勢下向までの行事を背景にして、御息所について「たゞ、あやしう、ぼけくくして、つくく」と臥し悩み給ふを」(三三二ページ)と記し、Iの⑨の記事に加えてその苦悩から生霊の遊離へ至る必然性を増幅している。

⑩などには物語の進展における源氏の年齢的契機が窺え、これらの挿話による既存の挿話の連結を通して既に明確な長編的視野が生まれていてその下で他の巻との関係を見通しながら内容を整えているという事情も考慮すべきであろう。従ってこの制作の段階で「紅葉賀」巻の記述内容と関らせこの巻を源氏の栄達の路線に位置付ける①冒頭部も加えられたものか。そしてこの①の桐壺帝の退位の記事が付されたことをうけて、相即してこの巻の中で「桐壺」帝を「院」に変更することになったのであろう。

そのほかに書き加えられた挿話がある。葵上死後の哀傷を描く⑬¹⁴など、抒情性の濃密な挿話である。⑬で葵上を失って葬送の後⑭でやるせない哀別の姿をみせる源氏は、⑮で六条御息所に、

かの御息所は、斎宮は、左衛門の司に入り給ひにければ、いとゞ、いつくしき御清まりに事づけて、きこえも通ひ給はず。(前掲)

と慰めを求めながら彼女との音信のないことを嘆いている。源氏の孤独な心情を湛えて話の流れとしてはここで一つのまとまりがみえる。作者は⑭までのIの系列にこの⑮の挿話を添え完結した形にしようとしたものと思われる。しかしこうした⑮の源氏の空虚な心をそのままにできずその欠如を充填するかのよう⑯以下更に書き加えがおこなわれるのである。折しも都合好く御息所から歌が送られるのは、その文通がかなわぬものとしていた⑮との間に落差があり、御息所側からの歌という不自然さとともに、新たな書き添えであることを示していよう。こうして⑯で御息所との贈答が描かれることになったわけだが、これによっても源氏は十分な慰撫を与えられない。

聞えぬ程はおぼしるらんや。

人の世をあはれときくも露けきにおくる、袖を思ひこそやれ
たゞいまの空に、思ひ給へあまりてなむ

という御息所の慰めのことばに対し、源氏の心にはやはり葵の死を導いた人としての悔しさが沸きのほるのであった。それ故返事に「かつは、おぼし消ちてよかし」という、生霊の件をほめかすことばを書き入れてしまっているのである。(以上三三二―三三三ページ)御息所はこのことにより更に物思いを昂じていく。――以上のような書き添えの事情が推測できる。そして御息所との贈答において求められた哀傷の「あはれ」の情趣は、引き続き⑯以下の時間の中で求められ、濃密に書き尽くされる。三位中将・大宮・朝顔姫君・葵上付女房・左大臣・桐壺院・藤壺中宮などとの抒情味溢れる交際がここで量みかけるようにして描かれる所以である。¹⁵

こうして書き添えられた内容は「賢木」巻の六条御息所との野の宮の別れ(三三八―三七三ページ)や三位中将との風流韻事(四〇七―四〇九ページ)、「須磨」巻の源氏の京を退く前の人々との別れ(一三二―九ページ)や三位中将の須磨訪問(四九―五二ページ)などと同質のものである。それら「賢木」巻・「須磨」巻の挿話が情趣性を目的にした書き添えであることは既に指摘したことがある。¹⁶以降はそれらの件りと情趣的世界への横滑りという点で同様な形で書き添えられたものであることが容易に推測できる。

なお⑯については、「野の宮の御うつろひの程」(三四四ページ)ということばがあり、斎宮の伊勢下向の日程を書き入れて、④、⑩、⑮と同じ段階の書き入れとも思えるが、これについては前述のように⑯が⑮で一つのまとまりをつけてからのものであり、それは右のことばを含む。

さるは、大方の世につけて、心にく、よしある聞えありて、昔より名高く物し給へば、野の宮の御うつろひの程にも、をかしう今めきたること、多くしなして、「殿上人どもの、好ましきなどは、あさゆふの、露分けありくを、この頃の役になんする」などき、給ひても

とある姿が⑮の「いとゞ、いつくしき御清まり」と大きな落差がある事からも首肯できよう。つまりこの⑮における記述は「賢木」巻の野の宮の別れにおける

殿上の若君達など、うちつれて、とかく立ちわづらふなる庭のたゞずまひも、げに、艶なる方に、うけはりたる有様なり。(三二七ページ)

と照応し、⑮の段階までの御息所の孤絶した悲しみとは懸け離れた情趣の世界を楽しむ余裕のある内容としてこの⑮などの書き添えより後の書き添えと考えたい。

また別の構想的要因により⑯の朧月夜についての挿話も書き加えられる。⑳のは「花宴」巻の内容を受けてのものであるが、この「花宴」巻については、風巻景次郎氏が「紅葉賀」「葵」など物語の第一主題（藤壺対源氏の白鳥処女伝説的關係による古物語的主題）による巻々の成立の後、「須磨」「明石」巻など第二主題（古物語的影響から解放された大人になった源氏の物語）の展開の序曲として要請されたものと捉えられている。第一主題においては須磨流謫以後の源氏の繁栄を導く展開を可能にする筋立はなく新たにそれを導くものとして、「花宴」巻が必要になり遡って補われたと考えられる。「葵」巻⑯の朧月夜をめぐる件りはこの須磨への流謫を見通した構想に伴って加えられた箇所、これによってこの巻が源氏の須磨流謫に至る流れを支える形を持つことになる。¹⁹⁾

このように長編的視野においてⅢの系列の挿話群が「葵」巻に加えられるいくことで、物語の時間が整えられ、情趣的な広がりが確保されることになるが、このような書き添えによってⅠの世界の奥行きを深めつつ作中人物の形象の膨らみを導いていることも注目してよい。例えばⅠの段階からⅢの記述を書き込む中で六条御息所はその人間像の特質を明瞭にしている。つまりⅠの③の(e)に現れるような生のままの懂れや⑨の生霊をめぐる直截的瞋恚の女の根源的心性に基づく姿がⅢの④で「いととはづかし、由ありて」という

ような情趣的ふるまいや⑦での行動性を失ったところでの内攻する執念深さという要因を加えて、抑制された自我をもった姿を呈し、「深刻な苦悩の表れ」として内向し屈折する追いつめられた魂が、突如として狂暴な霊となって現実に働きかけるといふ、理性を越えた深層心理的な緊迫感に、真の怖ろしさがある¹⁹⁾という固有の豊かな形象性を獲得することになるわけである。

また源氏にしてもこうした執筆の重なりによってその人間像の膨らみが保証される。この巻においては当初の源氏の造型としては③の(e)の「さらぬ顔なれど、ほほゑみつゝ、しりめにとゞめ給ふもあり」など、見られる側にあつてこの上ない魅力を湛えた人という程度でその心内のありようを丁寧に描いた豊かな人間像に至つてはいないといえる。それが数次にわたる書き加へにより、多くの思い人に心を碎き、葵上の哀傷においては豊かな感情量を身内に湛える人として現れ、源内侍の挿話にみられるような恋愛の遊戯性、あるいは趣味を備えた魅力的な色好みの姿を演ずるようになっていく。

加えてこのⅢの段階で紫上が源氏最愛の女性として定位されていることも注目すべきである。前述⑮の中で、「二条の院にだに、あからさまにも渡り給はず」ということは、その前提として二条院の紫上が源氏の心をひく最上の人という認識が出来上がっていることを示している。

こうして作中人物の特質を明確に書き分けながらその意義を確定して物語の長編的な成長が促されていくのである。

七 結 語

以上、「葵」巻をⅠへ葵上・六条御息所をめぐる挿話群、Ⅱへ紫上をめぐる挿話群、Ⅲへ二系列の統合以後の挿話群の三つの系列に分け、それぞれの内容とその関係を吟味することでこの巻の制作の経緯を明らかにしてきた。まとめると、この「葵」巻は次のような制作の順序を踏んで成立している

ることが考えられる。

まずIとして

・源氏を大将とした設定の下での御息所と葵上の挑み合いをめぐる規模の小さな話の成立(③の(b)・(d)と⑨、③の(a)・(e)・(h))。

という原初的な段階があり、それに

・持続的時間の中でまとまりある話に整えて人間関係を確定するための書き入れ(②、⑪・⑭)。

がおこなわれた上に、物語の別の流れとしてIIの順次の組み入れ(⑤の前半と②⑤、追って⑤の後半、②⑥、②⑧)が考えられ、そして更にIIIとしては、

・IIをIに融合するための記事の挿入。六条御息所の伊勢下向の日程の確定などと並行して物語の長編的形への更なる整序。(④、⑥、⑦、⑧、⑩、⑬、⑭)

・冒頭部の定位。桐壺帝譲位などの要因を含んでの他の巻との関係付け

(①)。それに伴って巻全体にわたる「帝」の「院」への書き替え。

・葵上哀傷をめぐる抒情性を湛えた挿話などの付け加え(⑬・②③、②⑨)や

「花宴」巻の記述を受けての源氏須磨流謫を見通した朧月夜の事蹟の書き入れ(②⑦)。

という諸段階が考えられる。

Iの二つの段階の間には作者において相当な創作意識の変化のあったことが推定される。Iの原初構想としてこの「葵」巻に限っては、六条御息所の屈辱(③)とそれに起因する魂の遊離(⑨)が考えられるが、この段階のモチーフで「葵」巻以外のものは、

・源氏の藤壺との逢瀬(「若紫」巻、二〇六ページ)⁽²⁰⁾

・源氏の須磨への流離(「須磨」巻、三八一四二ページ)⁽²¹⁾

などが考えられる。これらは「葵」巻の③、⑨と同様、深い情意を湛えた歌を含み、その場面のみに完結する性格をもっている。例えば「伊勢物語」の

一章段のような形式と繋がり、そうした歌を核とする小規模な話として、当初書かれていたことが想像できよう。そしてそれら歌物語的な叙述の重なりをもって源氏の事蹟を語るこの物語の原初的なありようは、高貴な女性との許されぬ密やかな恋とそれの露顕による流離という筋立を呈するもので、『伊勢物語』二条后章段群と東下り章段群の連結を思わせる。『源氏物語』の初めの形が現れる際の、『伊勢物語』の影響力の大きさが確認されよう。

およそ風巻景次郎氏が「花宴」巻を「須磨」「明石」の物語の展開の序曲と考えられていることは既に指摘したが、それは、「花宴」巻が「若紫」「紅葉賀」や「葵」などの巻々がその基本的な形を作りあげてから成立したことを示す。このとき「須磨」巻の原初構想としての源氏の流されはこの「花宴」巻の成立以前既に存在していた⁽²²⁾と考えられるので、そうすると、源氏の須磨退去はもとほ朧月夜との密会の露顕をその原因とするものではなくなる。朧月夜の存在を欠いたところでの源氏の須磨への流離となると、その流離の契機は「若紫」の藤壺との逢瀬に求められることになろう。つまり、当初の物語は藤壺との密通による源氏の配流という筋書をもっていたわけである。それでは須磨流謫以降の源氏の繁栄を導く展開が不可能となることでそれを避け新たに朧月夜との交渉を描く「花宴」巻が要請されたのではない⁽²³⁾か。こうして朧月夜との恋による流されに変更され、筋がまとめられることになった。右の経緯を勘案すると、やはりこの物語の原初的な形は、『伊勢物語』「昔男」の二条后との報われぬ恋と失意の東下りという筋書などを踏まえての、藤壺との密通に起因する源氏の流離を歌物語風に描くものであったことが想像できる。そして右の原初的な段階における「点」としての源氏の生のかたどりを繋げ、持続的時間の中でその生を描こうとして新たに肉付けがなされ「葵」巻のIにあたる段階の物語が成立したわけである。

これらの構想は『伊勢物語』の「昔男」の東下りを念頭にして須磨流離のあたりまで確立していたものと考えられるが、その間藤壺とのかなわぬ恋愛

から派生した紫上をめぐる話が藤壺の形代の位置を出発点にして並行して膨らみをもっていく、更に両者を合流させその世界の奥行きを保証しながら挿話が入り入れられて、息の長い源氏の逆境とその克服を見通した物語が構築されていくのである。つまり、この段階で情動的な挿話の組み入れがおこなわれる。これらが「賢木」巻・「須磨」巻の増補の箇所と同質の叙述であることは前述したが、こうして各巻の抒情性を豊かにした上で長編的時間が整えられていく。前述のように「花宴」巻に始まる臘月夜との交渉を組み込むのもこの時点のことで、これにより源氏の須磨・明石流離以後の筋立が展望される。こうした挿話の重ねによって須磨流離までの物語が整えられた上で「明石」巻を経て「滞標」巻以降、自律性に支えられて新たな方法により源氏の光明の物語が進展していくのである。

源氏の須磨流離に至るまでの物語の段階にあつては、各巻を構成する挿話とその叙述の通り一律に執筆されたものではなく、その制作に多くの段階が存在するものであった。本稿ではこの観点から「葵」巻を解析し、作者の物語創作の姿を明らかにした。「葵」巻における叙述の重なりは、それぞれの段階の作者の物語創作の意図の変化を裏書きするものであったといえる。作者はこうして執筆を重ねていくことで、各々の主要人物の心の内面を膨らませ、統一した物語世界を目指しつつその質を高めていったのである。こうして、「葵」の上をとり殺した御息所もまた、源氏の身辺から姿を消さざるをえなくなり、そこで初めて紫の君の新枕を描く局面が開かれ、「紫の君が名実備わった二条院の女主人になる」という物語展開における「葵」巻の意義を確定しながら、源氏の青春の軌跡を総括し、更に逆境を経て繁栄に至る長編の展望の下でその生の形象化を企てていくことになる。

(1) 本稿における『源氏物語』本文の引用は、以下山岸徳平氏校注『源氏物語』（日本古典文学大系、岩波書店）による。ここに掲げたページ・行の数字は右のテキストに従ったものである。なお本文の引用の際は、ページのみを示す。

(2) 清水好子氏「光源氏論」（『国語と国文学』昭五四・八）。

(3) ⑩以降の葵上哀傷に関つて情動性を湛えた挿話を除く。これらは後述するように巻冒頭部の書き入れ以後のことと見なすことができる。

(4) ⑭の位相については第五・六節で検討する。

(5) 北山の僧都のこととして「此（の）、かみの聖の坊に、源氏（の）中将、わらは病まじなひに、ものし給ひけるを、たゞ今なむ聞きつけ侍る。」（一八六ページ）と、藤壺の妊娠に際しての「中将の君も、おどろくしう、さま異なる夢を見給ひて、」（二〇七ページ）とあるところ。「若紫」巻にも制作にいくつかの段階があり、これらの例は長編の見通しにおいて他の巻との体裁を整えるために後の段階で加筆されたものと考ええる。こうした点については、別稿において論ずる予定である。

(6) 松尾聡氏「紫上——一つのや、奇矯なる試論——」（『解釈と鑑賞』昭二四・八）。

(7) 秋山虔氏「紫上の初期について」（『国文学』昭三六・五）。

(8) 秋山虔氏「紫上の変貌」（『国文学』昭三九・五）。

(9) 葵上が和歌を詠まない女性という指摘（森下幸男氏「葵の上について」（『日本文学研究』第一号、昭三三・五））があるが、これは本来的な人間的特性でなく、述べてきたような物語の膨らみに従ってその存在が求められ、その役割を確定してきたことによるものであろう。右の森下氏の指摘が葵上の性格からくるものでないことは、石川徹氏の「葵の上の生涯」（『講座源氏物語の世界』第三集、昭五六・二）、有

斐閣)に言及がある。

- (10) 『細流抄』本文の引用は、伊井春樹氏編『内閣文庫本細流抄』(昭五〇・二、桜楓社)による。

- (11) 阿部秋生氏「光源氏の容姿」(『東京大学教養部人文科学紀要』第四輯(国文学・漢文学Ⅰ) 昭和二九・一二)。

- (12) 池田勉氏「源氏物語「紅葉賀」の巻における異質的なものについて」(『国文学攷』第四二輯昭四二・三三)。池田氏がここで披瀝された制作過程は「かの、十六夜のさやかなりし、秋のことなど」(『葵』巻三四五ページ)が「末摘花」巻の源氏の末摘花訪問の記事を指すと解することに由来するものと思われるが、このことばの吟味については後日を期したい。

- (13) ⑭以降⑳まではⅡの核となる㉔を挟み入れながら⑩⑪⑫の記述を受けて順次書かれたものか。

- (14) 第二節で指摘したように、⑫では、源氏の左大臣邸を退出する際の女房と葵上への挨拶の内容の違いに院・春宮が同一の場所にいるような印象があることから、この記事が書かれた際には冒頭部の記述を意識せず、冒頭部はこれよりあとの執筆と見なしたわけであるが、㉔については院・中宮と春宮は同一のところにいる印象があるものの、こちらは明確に冒頭部との矛盾とはいえず、⑫の執筆の意識をそのまま受けたことで源氏の院の御所から内裏への移動を書かなかったものと考えられる。冒頭部より前の記述とは断じ難いところもあり、一応冒頭部を㉔より先に書かれたものとしておく。

- (15) 岡崎義恵氏は「特に葵上の死後、左大臣家の悲嘆を描くことは、余りにくどい程で、この物語の「あはれ」が悲哀・寂寥の面をあらわした部分として、代表的なものである。」(『源氏物語の美』(『解釈と鑑賞』昭和二二・六))と評されるが、「余りにくどいほど」という印

象は、既に書かれていた⑭、⑮までの記述に葵上哀傷の挿話を重ねることによって導かれたものと考えることができる。

- (16) 拙稿「『源氏物語』「須磨」巻制作過程略解」(『文芸研究』第一二二集、平元・九)、『源氏物語』「賢木」巻の制作に関する試論」(『富山大学教育学部紀要』第三八号、平二・三三)。なお、「賢木」巻の三位中将との風流韻事のあとの臘月夜への侵入の一件は、この風流韻事で須磨に繋がる切迫性を失ったための書き添えと解釈できる。

- (17) 風巻景次郎氏「源氏物語の成立に関する試論——紫の上と明石上との物語——」(『国語国文研究』第九号、昭三一・三三)。

- (18) この㉔の書き添えは、「花宴」巻の源氏・臘月夜の逢瀬に呼応する「賢木」巻の最初の二人の逢瀬(三八一―三八三ページ)において源氏流離の構想が確定して以後、この「葵」巻をその流離の構想と結び付けるため、廻っておこなわれたものであろう。

- (19) 大朝雄二氏「六条御息所の苦悩」(『講座源氏物語の世界』第三集、昭五六・二、有斐閣)。

- (20) 「見てもまた逢ふ夜まれなる夢のうちにやがてまぎる、わが身ともがな」(源氏)「世がたりに人やつたへんたぐひなくき身をさめぬ夢になしても」(藤壺)という歌の贈答をめぐる件り。これの原初的箇所であることは、この件りが物語に現れる最初の二人の逢瀬であるのに、このすぐあと妊娠三カ月として書かれており、この間の叙述に不自然さがあることで推測できる。右の二人の逢瀬を時間性をもった叙述の中に組み入れようとして生じた齟齬であろう。この点を含めて後日に考察するつもりである。

- (21) この件りが物語の原初的段階のものであることは(16)に掲げた拙稿「『源氏物語』「須磨」巻制作過程略解」で述べたことがある。参照いただければ幸いである。

(22) (16) に掲げた拙稿「『源氏物語』「須磨」卷制作過程略解」を参照いただければ幸いである。

(23) 「花宴」巻で源氏はあれほど焦がれたに拘わらず、「賢木」巻源氏二十四歳初秋の朧月夜との贈答の折のこととして、

かやうに、おどろかし聞ゆるたぐひ、多かめれど、情なからず、
うちかへりごち給ひて、御心には、深う、染まざるべし。(三九
九ページ)

と記され源氏の心を強く惹く対象とはされず、また帰京しては、
めでたき人なれど、さしも、おもひ給へらざりし、気色・心ばへ
など、物、思ひ知られ給ふまゝに、「などて、わが心の、若くい
わけなきにまかせて、さるさわぎをさへ、引き出で、わが名を
ば、更にも言はず、人の御ためさへ」など、おぼし出づるに、い
と憂き御身なり。「濡標」巻一〇二―一〇三ページ)

と、朧月夜が源氏の愛を繋ぎ止められないことを自覚する心内のこと
ばのあることは、既に朧月夜は源氏を流離させるための存在としての
み機能し、源氏との恋愛は成就しないことが構想として見通されてい
たことを示すのではないか。これらの例は朧月夜の構想的意義が須磨
流謫を導くことにあり、これをもって終わることを示すものであろ
う。

(24) 大朝雄二氏(19)に掲げた論文。